

あなたのスキルは社会に役立つ

エンジニアだからできる社会貢献

東日本大震災の発生直後に発足したHack For Japanや「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーを始めとして、日本各地で技術を活用した社会貢献活動が行われています。本連載では、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアだからできる社会貢献」の取り組みをお届けします。

第138回

ITコミュニティ「エフスタ!!」3年ぶりの開催!

- Tably株式会社代表取締役 Hack For Japan 及川 卓也(おいかわたくや)
- ヤフー株式会社 Hack For Japan 鎌田 篤慎(かまたしげのり)

東日本大震災をきっかけに生まれた、ITによる復興支援を目指したボランティア団体「Hack For Japan」では、これまでの復興支援に関わる活動から、東北地方で頑張るさまざまなITエンジニアたちと出会い、その人たちが活動するコミュニティともつながりました。

福島県でもひととき元気のあるITエンジニアのためのスキルアップ応援コミュニティ「エフスタ!!」^{注1}が、コロナ禍で開催を断念していたオフラインの勉強会を、2023年3月11日という、あの日から12年たった今年、数年ぶりに実施することになりました。そこで、関わりの深いHack For Japanメンバーである筆者ら(及川、鎌田)が、「東日本大震災当時の振り返り」そして「これからの社会とIT」をテーマに登壇してきました。その内容とともに、若者が集まり、福島県内でのIT産業ともつながりを作り続ける「エフスタ!!」の勉強会の様子をレポートすることで、イベント運営のヒント、彼らの福島県の未来を願う活動をお伝えできればと思います。

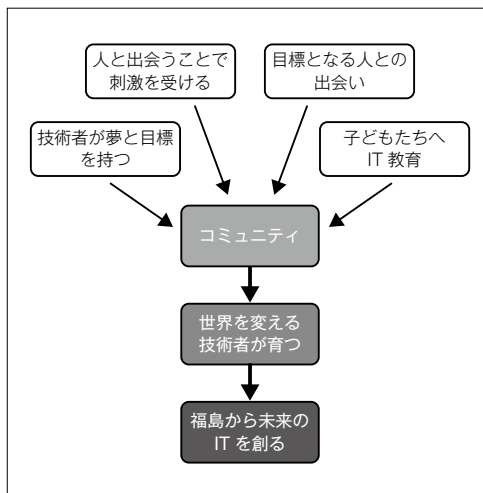
「エフスタ!!」とは

初めて「エフスタ!!」というコミュニティを目にする読者の方のために、簡単にこのコミュニティについて紹介しようと思います。「エフス

タ!!」は、IT業界で働く人たちが楽しんで仕事ができるよう身の回りのIT業界を変えたい、夢と希望を持った技術者を育てたい、そのために教育に力を注ぎたい、という考えを持ったコミュニティです。「エフスタ!!」の地元である福島のITが変われば、おもしろくなれば、夢と希望を持った技術者が増え、世界を変える技術者がやがて誕生する、という理念を実現するためのきっかけ作りの場として運営されています(図1)。

また、「エフスタ!!」の語源は「福島スタイルを変える」から「エフスタイル」に略され、語呂のよさから今の「エフスタ!!」というコミュニティ名に落ち着いたそうです。

◆ 図1 「エフスタ!!」活動理念



注1) <http://efsta.com/>

僕たち私たちの12年とこれから

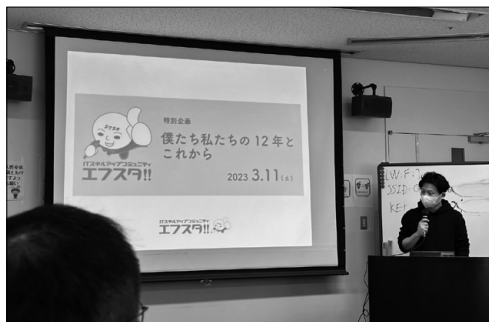
さて、東日本大震災から12年が経ち、当時より震災からの復興もIT技術も大きく進みました。今回紹介する「エフスタ!!」の久しぶりのオフライン勉強会は、そうしたこれまでの振り返りと、これからの社会を考えることをテーマに「僕たち私たちの12年とこれから」^{注2}と題して、福島県郡山市で開催されました。この久しぶりの勉強会の参加者は、ITエンジニア、そのほかの職種の方もいれば、ご高齢の方から当時の記憶も薄い学生たちや、まだ生まれる前だったお子さんも参加するという年代も多様な勉強会となりました(写真1)。当時の記憶が鮮明な人からそうでない人まで幅広く参加されていたので、そういう意味でも震災からの12年を振り返るといのは大切なことだと感じます。また、振り返るだけでなく、これからの社会を見通すテーマでもあり、未来を見据える勉強会となったのではないのでしょうか。

ソフトウェアの進化と学び方

トークセッションのトップバッターとして、筆者(及川)からは「ソフトウェアの進化と学び方」と題してお話ししました(写真2)。

注2) <https://efsta.connpass.com/event/275898/>

◆写真1 数年ぶりの「エフスタ!!」開催を告げる代表の久保仁さん

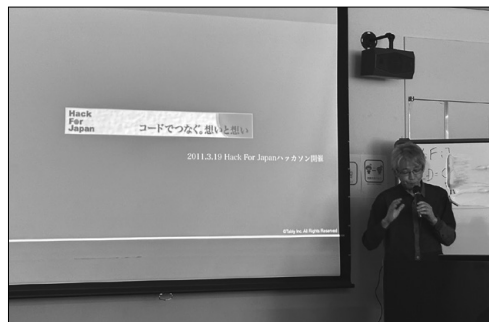


東日本大震災の際に、ITがインフラになっていると信じていた筆者は、電気やガス、水道、道路といったライフラインが急速に復旧したにもかかわらず、携帯電話やインターネットがなかなか復旧しなかったことにたいへんな無力感を感じました。自分に何かできることはないかと模索し始めた中、Hack For Japanというコミュニティを立ち上げました。当初は、ハッカソンを手法として、被災地で役立つであろうツールを開発することを目的としていました。ハッカソンで開発されたツールを振り返ると、役に立ったものもあった反面、ハッカソンには限界があったこと、被災地で求められるものは最新のテクノロジーを必要とするものばかりではないことに気づかされました。

そこで、開発だけではなく、ITで災害に向き合うための横連携を模索するためのIT×災害会議を立ち上げました。これは年次会議の形となり、3年間続きました。その会議をきっかけに、今でも続く各種団体や活動が生まれています。筆者は、一連の災害関係の活動に共通するのはITであることに気づかされました。災害に対しての強靭さ^{きょうじん}を高めるには、IT活用力の強化が必要不可欠です。

この12年間のソフトウェア技術の進化を振り返ると、ノーコードやローコードというプログラミングの民主化のような動きと、ChatGPTなどを始めとする大規模言語モデルやそのほかのAIの普及があります。技術の進化は人を楽にす

◆写真2 震災当時の振り返りと新しい時代の学び方を話す筆者(及川)





るという一貫した流れがあるとおり、ノーコードやローコード、AIが普及することで、プログラミングのハードルが下がり、誰でも簡単にアプリケーションやツールを作れるようになってきました。これは、ソフトウェアを学習するうえでは注意が必要です。これまでを大事にすべき部分もありますが、開発すること自体には良い面があります。日本は現在、IT後進国と認められるようになってしまいましたが、IT教育に力を入れていることは好ましいことだと思います。IT教育の強化に取り組むことで、今後の災害や社会問題に対して強い国づくりができるのではないのでしょうか。

筆者たちは、12年前の東日本大震災でITを活用した経験を通して、ITの力を社会に活かすことができるということを学びました。そして、ITは今後もますます進化していくことが予想されます。私たちは、技術の進化に合わせて、社会が求めるものに対応できるように、常に学び続けることが必要だと思います。IT技術者である私たちは、常に人々が直面する問題に向き合っていくことが求められます。技術は人を楽にするものであることは間違いありませんが、同時に、人が担当し続けなければならないものは何であるか、何を学ばなければならないのか、そんなことも考えなければなりません。

私たちは、ITの力で社会に貢献できると信じています。そして、私たちの努力が、未来の社会をより良くすることにつながると信じています。

震災とこれまで、AIとこれから

続いて筆者（鎌田）は、「震災とこれまで、AIとこれから」と題してお話しました（写真3）。

筆者は立ち上げ当初のころから、福島県の中で活躍される「エフスタ!!」さんと交流を深めていましたので、出会いから今日に至るまでの「エフスタ!!」さんと一緒に取り組んできた勉強会や、東京で開催される「エフスタ!!TOKYO」、さ

らには大規模なイベントとなった「エフサミ!!」などの数々のイベントを1つずつ振り返りました。また、筆者は当時の福島第一原発内の視察にも参加した経験（本誌2019年7月号）をふまえて、福島第一原発での廃炉作業に時間はかかりつつも、現在は原子炉建屋近くでも防護服を着ずにいられるまでに回復していることをお伝えしました。そして被災地や東北地方に馴染みのなかった筆者にとっては、参加者の方を含む東北地方の多くの人たちと出会うきっかけにもなった出来事であったという振り返りを行いました。

後半の「AIとこれから」については、今年に入ってから非常に注目を集めている生成AIと、そうしたAIが社会にもたらす影響を予測し、どのような世界がやってくるのか、その中でどういった行動が人々に求められていくのかをテーマにお話しました。

文章を入力することで非常にクオリティの高い絵を描くStable DiffusionやMidjourney、質問文に対して非常に納得度の高い回答を返すChatGPTなど、そのほかさまざまなAIが非常にすばやく誕生し続ける背景には、基盤モデル^{注3}という概念があります。基盤モデルを簡単に説明すると、テキストや画像など、さまざまな大規模なデータセットをもとに学習させたモデルで、ファインチューニングなどを行うことで、さまざまなタスクに適応できるという概念です。

注3) <https://arxiv.org/abs/2108.07258>

◆写真3 筆者（鎌田）による震災の振り返りとAIについての話



結果として、絵や質疑応答を行うさまざまなAIが生まれています。

こうした基盤モデルの説明をふまえ、生成AIの可能性を紹介しました。具体的には、注目された絵を描くAIで利用される拡散モデル^{注4}の構造を説明しながら、絵を描くAIに「エフスタ!!」公式キャラクターのエフスタくんを描かせてみました。また、質疑応答するAIで用いられるRLHF^{注5}について、ChatGPT^{注6}の構造をもとに解説しながらChatGPTに「エフスタ!!」の説明をさせたりもしました。

大なり小なり、生成AIの社会浸透は避けられないことが予想されます。「こうしたAIで課題とされている大規模な学習データに内在する問題や、必ずしも正しい答えが得られないといった構造を理解しつつ、上手に使いこなしていきましょう」と結んで、セッションを終えました。

12年の振り返りとこれからのパネルトーク

講演の合間に「エフスタ!!」の影山哲也さんを司会に、同じく「エフスタ!!」の大久保さん、Hack For Japanの筆者らで震災当時の状況と今後の抱負につながるトピックをいくつか選びながら、パネルトークを行いました(写真4)。

このパネルトークでは、震災当日の様子を互いに話し合い、鮮明な記憶がよみがえるものとなりました。同時に、当時を振り返ることで「極限の被災状況の中で我々IT技術者に何ができて、何ができず、どういう貢献のあり方があるべき姿か」ということについて、筆者(及川)の発表内容も題材にディスカッションが進みました。震災からの復興も技術も進んだ社会の中で、勉強会に参加された方たちにとっては震災という非常時に起こり得る状況の再確認になったり、とくに若い人にとっては新しい視点を得られた

注4) <https://arxiv.org/abs/2006.11239>

注5) Reinforcement Learning from Human Feedback、人間のフィードバックデータを用いた強化学習のこと。

注6) <https://openai.com/blog/chatgpt>

りしたのではないのでしょうか。また、恒例のライトニングトークでは会場から学生の飛び入り参加者なども現れ、大いに盛り上がりを見せました。

福島県から明るくITをリードする「エフスタ!!」

「エフスタ!!」に参加されたことのない方は、ITプロフェッショナルの講演や、福島がテーマの話となると非常に固い勉強会という印象を持たれるかもしれません。しかし、実際に参加していただくと、この勉強会はどこかアットホームな雰囲気、リラックスしながら参加者同士で交流し、新しい人たちとつながりが生まれる場になっていると感じられると思います(福島名物のおやつが配られるおやつタイムもありました)。

もし、この記事を読んで興味を持たれた方がいらっしゃれば、今後の「エフスタ!!」にぜひ参加してみたいかでしょうか?(写真5) SD

◆写真4 エフスタ!!パネルトークの様子



◆写真5 郡山駅前に灯る「復興の灯火プロジェクト」の追悼の灯籠



※復興の灯火プロジェクト：
<https://fukkou-no-tomoshihi.org/information/event/547/>